

おわりに

今から一世紀ほど前の旧ソビエトで研究に取り組んだ心理学者のレフ・ヴィゴツキーは、著書「教育心理学講義」の第12章心理学と教師でこう述べています。

「生徒はいたるところで自ら知識を探し求めるのであって、教師からそれを得るときでさえ、教師の与えるできあがった食べ物を飲み込むのではないのです。」

「教師は教えなければならないという偏見」(を手放す必要があると指摘しています。)

「知識を獲得し、利用する能力を育てることの方が重要です。」

また、こう続けています。

「人間の生活は、こうして絶えざる創造であり、」「食事と睡眠、愛と遊び、労働と政治、すべての感情、すべての思想が、創造の対象となります。今日、狭い芸術分野で行われていることが、将来は全生活に浸透し、生活が創造的労働となるでしょう。」

STEAM を始めとする現在求められている課題や目標を、一世紀も前に予見し標榜しているのではと思わせられることが大変な驚きですが、そこを目指し、全校教師が探究活動を継続した結果のまとめが本誌です。

「家庭基礎」「科学家庭」で実施している「マイグラフィックシラバス」の作成とグループプレゼンは非常に盛り上がります。できることの可視化は、生徒一人一人の達成感を非常に高めると考えられますので、各教科でも取り入れてみてはいかがでしょうか。1年の単位でなくても、章の終わりに設定することも可能です。

主体的な学びフォーラムにおいて「見せどころシート」作成を中心に置いた対話の機会を持つことは、各自の理解・相互の理解につながる重要で必須な時間であることが実感されたように思います。加えて来年度は、職員研修に毎回30分程度でも授業改善について対話する時間を設定してみてもはいかがでしょうか？

問いを磨いて「Eの問い」へ高める方法として試行したCanBeMapの取組みは、生徒感想にあるように、問いを深める取組であると生徒が実感しました。別の場面でも広く活用できそうであると考えられます。ぜひ授業の様々な場面で御活用ください。

考查問題に主体的な学びフォーラム等を通していただいたコメントを挿入した資料を共有しました。こちらもぜひ次年度の教科会で御活用ください。

「授業振り返り」は、教師が「生徒主体の授業デザイン」にするための工夫の観点が入り、工夫に活用できるものです。業績評価にも活用する等、多くの先生方にデータ分析を有効活用いただきました。次年度以降もよろしくおねがいたします。

来年も、職員全員で「授業改善で探究活動」の実践を面白がって楽しんでいきましょう。

